



Reading Roadmap

本好きな子に育つ戦略的ロードマップ
乳児期から小学校3年生まで

ホームエデュケーション・コーチ
中山まち子

edumother.com



こんにちは、中山まち子です。

2017年4月からブログ「透明教育ママ見参！！」にて家庭教育や子どもの学力を伸ばすヒントなどを発信してきました。関心の高いテーマの一つに読書があります。

今回は子どもの読書習慣を定着させるのにとっても重要な「乳児期から小学3年生まで」をテーマにしたロードマップをテンプレートにしました。

「本好きにさせたいけれどどうすれば良いのか分からない」

「子どもに良いとされる本に見向きもしなくて困っている」

いざ本を読ませようとしても、子どもが関心を示してくれないと話は始まりません。まずは「何が何でも本好きにさせる」という重い気持ちを降ろしていただくことから初めてみましょう。

子どもは「本を無理強いしようとしている」と察して、逆に本嫌いになることもあります。親自身がまっさらな気持ちになり、【子どもが勝手に本好きになる】戦略を考えていくことが必要です。

それでは年齢別に自然と本を手にする子になるアプローチ方法を伝授していきます。気になる年齢のみを読んでも構いませんが、すべての年齢のアプローチに目を通しておいた方が流れがつかみやすくなります。



本の楽しさを伝えたい乳児期

生まれて初めて本を見る乳児期。好きそうな絵本を図書館でリサーチ。破損する可能性が高いため乳児期は購入した方が無難。図書館の本を借りる際は保管場所に気をつけましょう。

- 言葉が短く耳に残るフレーズが多い
- 布や丈夫な紙で出来ている絵本
- 乳児が自分でページめくりができる厚さ
- 果物や身近にあるものが登場する
- 色や形がハッキリしている絵本

乳児の頃から「絵本＝楽しい」と感じさせることが大切です。生まれた時から本がそばにあることで、本が身近なものだと思えるようになります。

読み聞かせは親子のコミュニケーションツールでもあります。親が一方的に話をするのではなく、アレンジしたり「バナナだね。今朝食べたね。本のバナナと同じだね」と語りかけたり本物と見比べてみたりしましょう。



次の展開が待ち遠しくなる幼児期

イラストや言葉遊びで楽しんだ乳児期とは違い、幼児期になると物語の展開が気になるようになります。

好きなジャンルが確立していく時期ですが、そこにだわらず色々な物語を読んで視野を広げていきましょう。

- ジャンルを決めず様々な世界観に触れさせる
- 読み聞かせをする際は【臨場感たっぷり】を演出
- 「この後どうなるかな」とドキドキ感をUP
- 季節を感じる本を読んで知識を増やす
- 読み聞かせの時は登場人物になりきって読む

ストーリーを徐々に理解するような年齢になるため、お気に入りのシリーズを見つけたら毎日のように本を読むようになってきます。

これが子どもの本好きを確固たるものにする最初の兆候なので、しっかりつかみたいですね。



ストーリー性の高い本に触れる就学前の時期

子どもの好きな本、作者が固まってくる就学前の時期はとても大切。それなりにページ数のある児童書を1人で本を読み始める子も出てきます。

お気に入りの本を何度も読んだり、読んでとせがんできたり。活字に慣れ、文字をスラスラ読めることは就学に向けた訓練にもなります。

- お気に入りの本は購入して手に届く場所に置く
- 1人で読めたら大袈裟に褒める
- 好きそうなジャンルの本を図書館から借りてくる
- 時折「読んで聞かせて」と子どもに頼む
- 1人で読めるようになってもしっかり読み聞かせは続ける

子どもの好きな本がハッキリし、同じ作者さんの本を好むようになってきます。お気に入りの本は何度も読むので、購入して家に置きより本が身近なものになるようにしていきましょう。



1人で読むようになる低学年の時期

学校生活も始まると小学校の図書室に行く時に自分一人で本を探すようになり視野が広がる時期でもあります。親が本の対象年齢を気にしてばかりいると、子どもが本嫌いになるので気をつけてください。

- 自分で本を探すことを尊重する
- すきま時間に読めるタイプの本を借りる
- クラスメイトの好きな本を聞いてみる
- 親は本の対象年齢を気にしない
- 子どもが嫌がらなければ読み聞かせを続ける

就学後は宿題や習い事などもあり思うように読書時間を確保できなくなります。【10分で読める】ショートストーリーの本を図書館で借りてきたり、購入したりとみて読書時間確保に努めてみましょう。

【小学生になった瞬間からと読み聞かせをやめる】ということはず、親子の触れ合いの一環として読み聞かせは続行すると、より本好きな子に成長していきます。



自ら読書をする子になるサポートを

保育所、子ども園、幼稚園と就学前の集団生活を送る場所では先生達が本や紙芝居を読んでくれる機会があります。

こうした集団生活の場ではその場にいる子どもたちが達が本や紙芝居に触れることができます。そのため、本がより身近に感じるには保育施設以上に家庭の役割が重要になってきます。

そして【本好きな子】になるには乳幼児期の読み聞かせが欠かせません。乳幼児が勝手に1人で本を読むことはなく、親がじっくり読んでくれることが子どもと本をつなげる架け橋となります。

地道なことですが、読み聞かせを通じて徐々に本との距離を近づけていくことが一番最適です。ある日突然本好きになる子はほとんどいません。やはり小さい頃からの読書体験の積み重ねにより、本好きな子になるのが王道です。

親子で一緒に絵本を探すことは長い子育て期間のなかで一瞬の出来事です。私自身、もう少し楽しい時間を共有すれば良かったと子ども達の幼き頃を思い出して感傷的な気分になることがあります。

今はしんどいかもしれませんが、あっという間に時は過ぎ子どもは成長していきます。

そのことを忘れず、小さい頃からコツコツと自ら読書する子に近づけるようサポートしていきたいですね。